

第3章 日野町の歴史文化の特徴

鳥取県南西部にある日野町は、中国山地の砂鉄成分を含有する花崗岩と豊富な山林資源により古来より砂鉄製錬による製鉄業が隆盛し、地域住民の生活に深く関わっていました。また、町中央を流下する日野川がつくり出した河岸段丘、平野などに人々は集住し、黒坂では江戸時代に関一政によって黒坂城が築かれて城下町が生まれました。河岸段丘沿いには古代から近世にかけて山陰と山陽を結ぶ街道が整備され、交通の中継地としての歴史が随所に見られます。特に根雨は、江戸時代には出雲街道の宿場町「根雨宿」として栄え、本陣の門や町並みはかつての面影を今に伝えています。さらに、長楽寺に残る薬師如来像等の仏像群は、長谷部信連の来郡により、後世に仏教文化を伝えることとなる貴重な文化財です。

こうした歴史の歩みは、現在の日野町のあり方に深く関係のある歴史文化と考えられます。中国山地の自然に生まれ、自然と共生してきた「たたら製鉄」は、当地域における住民の生活の糧としてあり、町の近代化や教育の振興にも大きな役割を果たしてきました。中国山麓の日野川流域には黒坂城下町が形成され、人々の営みと日野の政治の中心地として機能し、また、出雲街道の整備は根雨宿、板井原宿といった宿場町を生み、山陰・山陽を往来する中継地として、現在の鉄道や国道につながるものとなりました。長谷部信連の活動は長楽寺の再興など当地域の寺社整備という側面から古代より人々の生活を支えていました。

日野町が形づくられてくる、これらの歴史の画期を日野町の歴史文化の特徴として捉え、以下のように整理していきます。

日野町の歴史文化の特徴

①たたら製鉄に関わる
歴史文化

②城下町黒坂とその形
成に係る歴史文化

③出雲街道と宿場町に
関わる歴史文化

④長谷部信連と祈りに
関わる歴史文化

①たたら製鉄に関わる歴史文化

本町は中国山地の豊富な資源を活かして古くから製鉄業が盛んで、生産された鉄は日野にとどまらず全国に供給されました。

日野町内の各地で確認できる「たたら場」は、伝統的な製法で古代から行われてきた製鉄業の歴史を物語っており、連綿と継承されてきた製鉄業に関わる技術や習俗は本地域の特徴的な歴史文化です。金持はその地名の由来に砂鉄産出に関連する伝承があり、当地域の金持氏の勢力基盤であったと伝わっています。近世後期には、技術の発達と鳥取藩の政策により多くの鉄山師が製鉄業に参入しており、中でも根雨の近藤家は経営規模が大きく、生産した鉄・鋼等を全国に供給しました。「たたら経営」には地域住民が炭焼きや砂鉄採取、物資運搬などで多数関わっており、たたら製鉄は農村部の経済を支えた産業でした。

その中核をなした近藤家は、大正期まで製鉄業を経営し、明治期の外国鉄に対抗するための技術改良やその精神は、根雨の町の近代化に寄与しました。

②城下町黒坂とその形成に係る歴史文化

黒坂の町の成り立ちは、慶長5（1600）年関ヶ原合戦から徳川氏の江戸幕府成立に至る経緯の中で各地の大名の転封が実施され、慶長15（1610）年伊勢から関一政が転封されてきたことが契機となったと考えられます。その後、鳥取藩として池田家が統治するようになると、重臣福田氏が支配し、黒坂には陣屋が置かれました。

それまで寒村であった黒坂の地に関氏が入部したことにより、町割りが行われ、また町を守るように寺院を配列させ、城下町が形成されました。鳥取藩はこれを継承して陣屋を置き、福田氏に黒坂支配が任せ、福田氏の家臣や多くの町人等が集住しました。陣屋の普請や清掃には地域住民が関わっていたとされ、このことは関一政の時代から続いてきたものとされます。陣屋支配は明治2（1869）年まで続き、その後、日野郡役所に転用されました。近世初期の黒坂支配と城下町・陣屋町の形成は、街路や町並みなどがそのまま現在に継承されているとともに、日野における政治の中心地としての歴史を歩んでいく画期となるものでした。

黒坂の町には、往時を偲ばせる山城や石垣、陣屋跡、町中には五つの寺があり、城下町のたたずまいを随所に見ることができます。また、黒坂を治めていた福田氏の墳墓は地域住民から「お墓さん」と親しみと愛着を込めて呼ばれています。

③出雲街道と宿場町に関わる歴史文化

日野町域は、中世における後醍醐天皇の往来や尼子氏の山陽進出などにみられる、山陰と山陽の行き来の要衝地で、近世初頭には舟場、根雨、板井原などを通過して上方へ通じる出雲街道が整備され、多くの人、モノなどが往来しました。

出雲街道は参勤交代を行う松江藩が利用し、当地を通行して江戸へと向かいました。根雨、板井原には松江藩の本陣や休憩所が置かれました。その本陣の門は町指定文化財として現

存するほか、本陣に掲げられた関札などの関係資料が残されています。根雨、板井原の町は宿場町として発達し、往時は旅館や店など多くあり、根雨には今でもお茶屋が残り、地域住民の憩いの場となっています。

このような古来より見られる山陰・山陽間の人々やモノの移動について、当地域は重要な「中継地」として認識されてきました。近現代には、大正期に鉄道が開通して駅舎が整備され、日野川沿いの段丘上には国道が整備されていきました。

人々やモノの往来に関わる歴史や文化財は、現在でもわたしたちの暮らしに関わりのある歴史文化です。

④長谷部信連と祈りに関わる歴史文化

源平の争乱で日野に来郡した長谷部信連は、滞在期間 7 年程度でしたが、寺社を整備するなど広範囲に活動しました。信連を追って来た子息郎党も土着するなど日野町の歴史文化の歩みに欠くことのできない一族です。信連の来郡によって、長楽寺の再興や延暦寺の建立、巖島神社の勧請が行われたほか、日野町内の寺社には信連の伝承が残るものが多くあります。信連が再興した長楽寺の本尊薬師如来像は平安後期作と伝えられ「木造薬師如来及両脇侍像」として国重要文化財に指定されています。また、同寺所蔵の「木造不動明王立像」「木造毘沙門天立像」も平安後期作と伝承し、国重要文化財に指定されています。

信連の活動は当地域の「祈り」の場の整備につながり、当時の地域住民に心の安寧をもたらしたとともに、現在でも地域の氏神や長楽寺の薬師如来など、そこに住む人々の心の拠りどころとなっています。こうした信連の来郡とその活動を支えたのは、同時代の当地域の豪族であった金持氏であるという説もあります。「金持」という名の由来は、砂鉄が多く産出することや鉄に関係するという伝承があります。現在、当地の金持神社には、その名を尊んで全国から参拝客が訪れます。